

No. 95

すくらむ

2021.3.1 発行



福井県特別支援教育センターは、県立病院関連四機関の4階にあります。

P.1

巻頭言

「ひとりひとりが自立した連携を目指して」

P.2

- ・ 特別支援教育担当教員の資質向上に向けた人材育成プロジェクトについて

P.3

- ・ 「センター的機能情報交換会」の報告
- ・ 吃音のある子どもをもつ保護者座談会

P.4

- ・ 実践研究発表会の報告
- ・ 次年度の研修講座について

巻頭言「ひとりひとりが自立した連携を目指して」

福井大学連合教職大学院 准教授 新井 豊吉氏

東京から単身赴任で福井大学に着任してから早いもので5年が経ちます。それまでは35年間、都立の特別支援学校教員として勤務しておりました。この5年間、学生の指導だけではなく地域の特別支援学校、小学校や中学校、そして社会福祉法人のスーパーバイザーとして様々な場面においてたくさん学ばせていただきました。感謝しています。今回はこの場を借りて、福井と東京の差異を考えたいと思います。福井の場合はやや教育の画一性、ヒエラルキーが強いように思います。東京は多様な建学の精神をもつ私立の学校も多く（私立の特別支援学校もあります）、特別支援に関する研修の機会も多いです。教員と保護者が同じ研修会と一緒に参加することも珍しくありません。教育・福祉・医療・保護者・本人を含めた支援会議も活発です。意見が合わず時として訴訟に発展することもあります。それはある意味、分野は違っても同じ土壌に乗っているという証拠でもあります。福井の場合は、通常学級の子どもや教員がトップにあり、その下に特別支援学級や特別支援学校がある。また教育は福祉よりも高次にある、保護者は教員の言うことに従うべき、という意識が強いような気がします。都市部と地方の情報量の違いが影響しているのかもしれませんが。ある保護者の方から相談を受けたことがあります。わたしが「個別指導計画にはどう書かれてあったのですか？」と聞いたら「それは先生が作成していて、わたしたち親や子の要望は入っていない」と言われて驚いたことがあります。わたしが「個別指導計画は、大枠は教員が作るとしても、親や本人の希望は考慮されることになっています。そして親や本人の承諾がなければ実施されないことになっています。面談のときにきちんと意見交換してください」と伝えると「先生には言えません」という返事が返ってきました。わたしたちはひとりの子について様々な時間帯にそれぞれの立場で関わっています。だからこそ伝えあわないと子どもの実態を共有できません。そこに上下関係はありません。その子が自分らしく生きていくために、保護者、本人を含めた健全な多職種連携を目指してほしいと思っています。



特別支援教育担当教員の資質向上に向けた人材育成プロジェクトについて

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所より、「特別支援教育担当教員の資質向上に向けた人材育成プロジェクト」の協力依頼を受け、今年度、「連携・協働」に関する研修コアカリキュラム（案）の実践的検証を行い、教育、福祉分野の専門家とも意見交換を重ねてきました。その結果、当センターが主催する特別支援教育担当教員を対象とした研修において、①福祉との連携、②地域で核となる特別支援教育担当教員の人材育成という視点に着目し、当センターの研修内容を次のように見直しました。



R3年度

研修講座

★福祉に関する研修内容を設定

★特担・特コ2年目以降の先生方が学べる経験者研修を設定

【福祉と園・学校との連携(8月6日)】

AM:福祉に関する基礎的知識と、園・学校、福祉のそれぞれの役割について学ぶ。

PM:園・学校と福祉がどのように連携していけばよいのかについて、実際の事例を通して学ぶ。

対象: **経験年数2年以上**の

特別支援教育コーディネーター

特別支援学級担任

【読み書きの苦手さへの支援と合理的配慮(8月18日)】

AM:「読み」や「書き」に苦手さがある子どもたちへのアセスメントや支援方法について、演習や事例検討から学ぶ。

PM:ディスレクシアの当事者の方より、読みの苦手さによる生きづらさ、工夫したこと、合理的配慮について学ぶ。

対象:AM **経験年数2年以上**の

特別支援教育コーディネーター

PM 全校種

【通級による指導の取組(8月19日)】 小・中学校の通級による指導について、指導の実際や通常学級との連携について実践報告から学ぶ。高等学校の通級による指導について、高等学校と指導に携わる特別支援学校の双方の実践報告から学ぶ。また、参加者同士での情報交換を行う。

内容:AM 小・中学校の実践と情報交換

PM 高校の実践と情報交換

【特別支援学級の取組(8月24日)】

内容:AM 小学校の実践と情報交換

PM 中学校の実践と情報交換

小・中学校の特別支援学級における指導の実際や学級経営の工夫点について実践報告から学ぶ。また、参加者同士での情報交換を行う。

※3月末に各園・学校に配付します研修講座パンフレットでご確認ください

特コ専門研修

授業研究リーダー研修

リニューアル!

学校や地域の課題を、同僚や地域の仲間を巻き込みながら解決していく課題解決型の実践研修

これから、学校や地域で中心となって特別支援教育を推進していくミドルリーダー、中堅教諭のステージの方を募集します。



※研修の具体的な進め方など、ご相談に応じますのでセンターへお声かけください。

「センター的機能情報交換会」(R2. 12. 2開催)の報告

第2回センター的機能情報交換会では、県内特別支援学校の特別支援教育コーディネーター等が集合し、センター的機能に関する情報交換を行いました。後半には独立行政法人国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センター主任研究員井上秀和氏による講義をオンラインで受講しました。これからの特別支援学校のセンター的機能の在り方について考える機会となりました。

井上先生のご講義より



特別支援教育の現状として、新学習指導要領では、「**障がい特性**」の指導から「**困難さ**」への指導上の工夫と明記されている。何が難しいのか(困難さ)から着目し、つまずきの原因を探ることが大切。とのことでした。

また、宮崎県のエリアサポート体制の主な成果として、「教育的ニーズのある児童生徒の理解の深まりと指導の専門性の向上」「県内各地域間での情報の共有および普及の促進」「個別の教育支援計画の作成の促進」「地域間、学校間における対応(指導)の差の緩和」「各校種間の相互理解の促進および連携の強化」などの紹介がありました。

次世代コーディネーターの育成

○なるべく2人1組で相談業務にあたりノウハウを引き継ぐようにしている。

※年度初めに時間割の調整を教務部に依頼

※長期休業中にペアで業務にあたる

○週1回または月1回程度、コーディネーター会を開いて、**情報共有**を設けている。

○報告会や相談会を実施して**学校全体で事例や交流の話題を共有**している。

情報交換を行いました

地域とつながる工夫

○地域の小・中学校教員に特別支援学校の授業公開をしている。

○教育相談に**ICT機器(遠隔システム)**を活用。

○**市町教育委員会や保育カウンセラーとの連携**を大切にしている。

○新特担には、特支校から連絡(メールやFAX等)をして相談に応じるようにしている。

今年も開催しました!

第4回 吃音のある子どもをもつ保護者座談会 (R2. 11. 21開催)

オンライン

ゲスト講演 「事例から学ぼう! 吃音のある子どもへの理解と支援」

今年度は、長野県東御市民病院の言語聴覚士、餅田亜希子先生とオンラインでつながり、前半は吃音を主訴とした相談の中でよく聞かれる悩みや疑問を事例形式で餅田先生とやりとりしながら、吃音の正しい理解や支援についての学びを深めていきました。後半はグループに分かれ、日頃の悩みなどを意見交換し、保護者同士の交流を図りました。以下に、事例の一部を紹介します。



Q: 連発の話し方から、少し力が入ったような話し方になってきています。しかし、本人も周りも吃音を気にしていないようなので、このまま様子をみればよいですか?

A: 本人もよくしゃべっている、周りの子も気にしていないように見えても、本人が無意識に吃音を出さないようにしていたり、仲の良い友達が話し方の違いに気づいてきたりしているのかもしれない。今あるよい環境を維持するために、吃音について正しく知ってもらうことが大切です。

子どもと一緒に吃音について話すいいきっかけになりました。随伴症状など知らなかったことが分かってよかったです。

Q: 本人と吃音について話ができる関係が大事と言われますが、どんな風に話をすればよいですか? 学校では吃音を出さないようにしているのではないかと心配です。

A: 本人に聞き出す前に、お母さんが思っていることを伝えることが大切です。そのままのしゃべり方でよいこと、正しい知識を伝えてあげてください。

どの事例も大変身近で、自分に置き換えて考えることができました。子どもの気持ちに共感してあげることが大切だと改めて分かりました。

Q: 本人が面接試験で吃音が出てしまうのではないかと悩んでいます。保護者としてできることはありますか?

A: まずは、不利にはならないと伝えてあげることが大切です。また、吃音があることを伝えずに面接をすることで、表現できない子、表現する力がない子と見られてしまい、2次的に不利になることは残念なことです。吃音があることを分かってもらった上での受験や、受け入れてもらえる学校への進学ができるとういことです。

周りに吃音の子がいないため不安でしたが、参加してみて同じように悩んでいる方がこんなにいると知り、安心しました。



参加者の声



実践研究発表会の報告

令和3年2月3日（水）実践研究発表会が開催されました。当センターと参加者を遠隔システム（Microsoft Teams）でつないで、保育所等訪問支援（福祉サービス）の実践、小学校や高校での通級指導における連携の実践、理解教育の取組、読み書き困難ケースの対応における大切な視点などの実践報告がなされました。初めてのオンラインでの開催でしたが、園、学校、関係機関など、100名を超える方々のご参加をいただきました。

参加者からの声

【フレンズあすわの実践から】

「本人の関心を引き出すこと、変化を見とってほめることが大事であると感じた」「目標を具体的に設定、客観的な評価尺度を取り入れた評価の導入等、効果的なサポートが素晴らしい」

【神山小の実践から】

「通級指導担当と担任との連携や学校全体での共有ができてるのが素晴らしい」「特別支援教育は『つながり』まさにその通りだと思った」

【丹生高等学校、南越特別支校学校の実践から】

「高校通級の指導内容はなかなか幅広く大変だと思いが、自己理解がないと社会で困ることも増えるので、是非続けてほしい」「コミュニケーションの取り方、気持ちの調整の仕方等、社会に出てからも大切なことだと思う」

「『連携』『つながり』といったことの大切さを改めて感じ、大変勉強になった」「移動時間がなく、自校で視聴できるオンラインの発表は参加しやすかった」「今回はオンラインだったので初めて参加できた。今後もこのような形であれば、周りの先生も誘って気軽に参加したい」

【細呂木小の実践から】

「各成長段階に応じた理解授業の実践は、学校全体の協力体制があっただけだと思った」「特別支援学級は、一人一人の『得意なところ』を生かす場所ということが印象的だった。他者理解のためには、まず自己理解からということを改めて痛感した」

【奥越特別支援学校の実践から】

「自立活動の教材は、既成の教育活動の中にあるという言葉が印象に残った」「自立活動の実践の共有は、校内資源を今後学校全体で活かしていく上で素晴らしい取組だと感じた」

当日は、それぞれの実践発表の後に、チャットで質問や意見を募集しました。「面談シートはオリジナルなものなのか」や「理解授業の際のアンケートのとり方」等について質問が出され、それぞれの発表者から答えていただきました。最後に、福井大学連合教職大学院の新井豊吉氏、荒木良子氏、笹原未来氏、小嵐恵子氏からご講評をいただきました。



次年度の研修講座について

次年度の研修講座は、**10講座**の開催を予定しています。そのうち5講座は県外講師による講座で、Microsoft Teamsを使った**オンライン研修**となっています。その他、県内の通級指導や特別支援学級の実践報告もあります。多くの方のご参加をお待ちしています！

次年度は、申込みの方法が変わります！

教職員は、福井県教育総合研究所の「**研修講座申込システム**」からの申込みとなります。申込システムを利用できない方は、指定のURLより申込フォームにアクセスして申込みます。詳細は、年度末には配付される文書や教育総合研究所の「研修講座案内」等でご確認ください。

センターだより すくらむ 第95号

発行日 令和3年3月1日
発行所 福井県特別支援教育センター
所在地 〒910-0846
福井市四ツ井2丁目8-1
TEL (0776)53-6574
FAX (0776) 52-6272
E-mail tokuse@pref.fukui.lg.jp
URL <http://www.fukuisec.ed.jp>